

「元気いっぱい・笑顔いっぱい」

特別支援教育統括コーディネーター 加賀谷 勝

「経験が、その人をつくり出す」

毎日新聞（8月1日）の投書欄に掲載されていた中学生の記事を紹介します。

「相手を気遣える人になりたい」

中学生 S・Mさん 12歳 東京都

学校からの帰り、私はいつも通り2人席の窓側に座った。すると、ヘルプマークを付けた男性が空いている隣に座ってきて、「どこで降りますか」と聞いてきた。私は「〇〇で降ります」と答えた。

私は少し驚いた。普通なら乗った途端に、隣の人にどこで降りるかなどとは聞いたりはない。「どうして聞いたのだろう」。バスに乗っている間、ずっと考えていた。

やがて私が降りるバス停に着いた。その時だ。隣に座っていた男性は、早めに席から立ち上がったまま体をよけてくれた。そして、お辞儀までしてくれた。

やっとわかった。男性は体が不自由なため、私が降りることがわかってから自分が立ったのでは時間がかかってしまう。だからあらかじめ私が降りるバス停を聞いたのだ。私がスムーズに降りられるように。

私は男性の心遣いに気付き、とてもありがたく思った。そして、私も男性にお辞儀をしてバスから降りた。相手を気遣って行動することは、相手だけでなく自分もうれしい気持ちになる。私も相手を気遣える人になりたいと思った。（原文のまま）

※ヘルプマークとは、義足や人工関節を使用している方、心臓疾患などの内部障害や難病の方、または、発達障害の方など、援助や配慮を必要としていることが外見からは分からない方がいます。そうした方々が、周囲の方に配慮を必要としていることを知らせることで、援助が得やすくなるよう作成したマークです。



友達におもちゃを貸せる子どもになってほしい、友達と仲良く遊べる子どもに育ててほしいと思っても、子ども自身が貸してもらってうれしかった、友達と遊んで楽しかったと思える経験をしていなければ行動に結び付かない。同じように、人を気遣える子どもを育てるためには、人から優しくされて、うれしかったという経験が必要である。人は自分がされたことを人に返すので、優しくしてもらうことで、さらに優しい気持ちが育つ。優しい気持ち（思い）は、誰にも見えないが、誰かのために行動することで、誰からも見える「思いやり（気遣い）」へと変わっていく。



とれたて直送便



○「落とさないように、息をぴったり合わせて」

先日ある保育園を訪問しました。友達と関わることがちょっと苦手なK君は、みんなと同じ空間にいたものの、一人でレゴを使って遊んでいました。片付けの時間となり、レゴを箱の中に入れ始めました。そして、最後にレゴの箱を所定の場所に返すとき、友達と協力して運びました。二人で運ぶためには、気持ちを合わせないとバランスを崩して箱を落としてしまうかもしれません。二人は息をぴったり合わせて運びました。身体を使って友達と共同作業を行うことは、気持ちを合わせる心地良さを体感しながら、互いを知る機会となり、良好な関係づくりにつながります。一人遊びの時間も保障しつつ、友達と一体感を感じる活動も意図的に取り入れましょう。

